

ライブラリアン・・・学びのインターフェイス

—— 館長に就任して ——

総合図書館長
経営学部教授

樋 口 兼 次



「学ぶ」という言葉は、「まねぶ」つまり「まねる」の古い日本語に、中国から取り入れた漢字の「学」つまり「おぼえる」「理解する」意味が加わって出来たという。だから「学ぶ」とは、真似て見習うことから始まり、それを記憶し、咀嚼し、理解するプロセスである。

そうした一連の「学び」のプロセスを支援するのが大学図書館の大きな役割である。そして、カウンターに常駐する司書（ライブラリアン）は、図書資料の収集・保管・閲覧管理などの事務、図

書の在処案内、検索のアドバイス、関連図書のアドバイスもしてくれる、図書館と利用者の間を媒介する「学び」のインターフェイスである。

私も小学校から大学そして今でも、母校の図書館や本学図書館のライブラリアンのアドバイスに助けられている。図書館長は、もともと「司書長」（chief librarian）であった。だから私にその資格があるとは思わないが、ライブラリアンとともに、利用者にとってより良い図書館づくりに微力を尽くしたいと思う。

大型絵本と言語学の本

—— 本にまつわる思い出 ——

教育学部教授

竹 長 吉 正

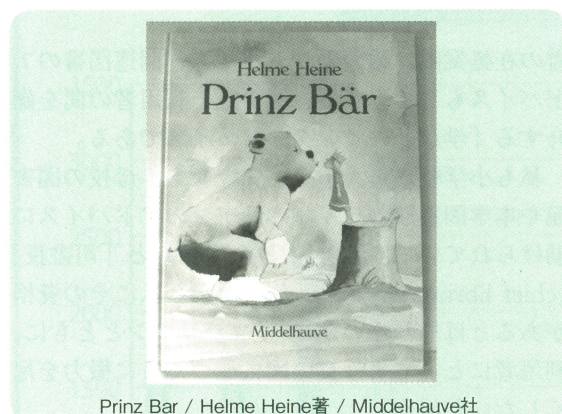


ドイツのハイデルベルクに行きました。平成4年6月の末から2週間ほどです。その時、ネッカー河を見下ろす街並みの中、メイン通りのある書店で、1冊の大型絵本を買いました。Prinz Bär. 作者はHelme Heine. たて458mm×よこ353mm。ホテルに帰って困りました。トランクに入るだろう

か。そんなことも考えずに、大きい本、大きい本と探していた自分がこっけいに思えてきました。

さて、この本ですが、絵がとてかわいらしくて、一気に引きつけられます。また、文もたいへんおもしろいのです。「どのクマの中にも王子さまがひそんでいて、どのお姫さまの中にもクマが

ひそんでいました。」というたいへん風変わりな文章から、この物語は始まります。「クマはなにも面白いものがなかったから、森の中で退屈していた。そこで、森から出て、道をぶらぶら歩いていた。すると、若いお姫さまが、御者付きの馬車で通りかかった。」しぜんに、次の場面が読みたくなります。「お姫さまは、うすぎたないクマを、まるでぬいぐるみをつかむように、つかんだ。御者はそんなもの、お捨てになったら、と言った。だがお姫さまは御者に隠れて、こっそり、クマにキスをした。するとクマは、見る見るうちに若い王子さまになった。御者は二人をお城へ連れて行った。城で王子は、わがままのしたい放題をした。」さて、この後、王子とお姫さまはどうなるのでしょうか。それは、読書好きの皆さんのために、あえて言わないでおきます。



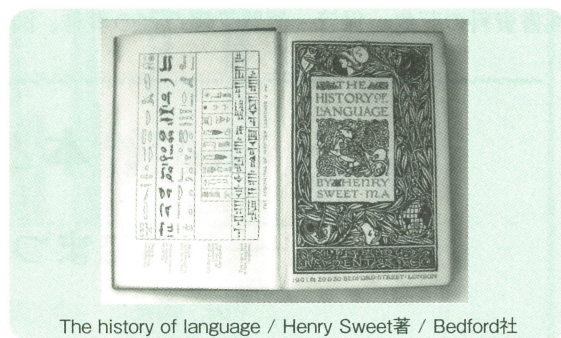
Prinz Bär / Helme Heine著 / Middelhaue社

私は日本に帰ったら、この本を翻訳して出版しようと思っていました。しかし、なんと、この本は既に出版されていたのです。残念！というほかありません。大島かおりさんというすばらしい翻訳家の方が訳しているので、安心しました。そこで気付いたのは、日本が翻訳王国と言ってもいいくらい、外国の本の翻訳をたくさん行っているということです。海外の知識や何かをいち早く吸収しようという国民性の現れかもしれません。

もう1つ、本の思い出として強く残っているのは、イギリスのシェフィールド大学へ行った時のことです。この大学のことは本学の馬場将光先生（前・教育学部長）も『白鷗大学教育学部論集』第4巻第1号でお書きになっていらっしゃるようですが、日本人の研究者や学生をよく見かける大学です。私は中央大学、立命館大学の先生や学生と知

り合いになりました。EAS (East Asian Studies) という研究組織に所属して日本語教育のことを研究していたのですが、ある時、Henry Sweetという高名な言語学者について論文を書かなくてはならなくなりました。Sweetが1900年に刊行した*History of Language*. という本の原本を見る必要が出てきたのです。イギリスの図書館がこの本を探してくれるだろうか。私はさっそく、シェフィールド大学の附属図書館に行き、検索をかけて調べました。今から12年ほど前（平成10年）のことですから、インターネット検索はそれほど発達してはいませんでした。それでも、ライブラリアンに教わって、やっと、この本の所蔵先をつきとめることができました。ライブラリアンに相談すると、その親切な女性のライブラリアンは、「この本はInstitute of Education Libraryにある。今はここへ持ってくるができない。あすの午後なら、渡せる。」と言いました。

そして翌日、念願の本と対面することができました。まるで、生まれたての子どもと対面するような、わくわくした気持ちは今でも忘れられません。手渡された本は、意外に小さな本で、日本の文庫本に似たサイズでした。全部で148ページありました。この本を見て私は、論文を完成することができました。たいへん、ありがたいことでした。



The history of language / Henry Sweet著 / Bedford社

それから3ヵ月後、帰国し、論文のコピーを木原研三先生（英語学）に送りました。すると、「君がこの本にそれほど熱中しているのなら、1冊あげましょうか。ほくは2冊持っているから。」とのお手紙をもらいました。さっそく、「いただきます！」と返事をしました。

本に熱中し、いろんな人と出会い、いろんなことがあった思い出です。

図書館への誘い

法学部講師

矢田 尚子



これまでの歴史を振り返ってみても、人々が知識を得たり、また、知的生産活動を行う上で、図書館という施設は大きな役割を果たしてきました。歴史上存在した図書館と言え、有名なものでは、古代エジプトのアレクサンドリア図書館があります。聞き及ぶところでは、このアレクサンドリア図書館は、随分と強引な方法（港に停泊した船から押収に近いようなことをしたとか）を使ったりもして、とにかく何十万冊もの書物を集め、アルキメデスの科学研究などにも貢献し、アレクサンドリアを学問の中心として発展させたといわれています。ただ、当時のことです。この図書館の蔵書を維持するのはものすごく大変だったようです。虫に本を食べられたり、他国との戦争で図書館そのものがダメージを受けたりしたそうです。そして、このアレクサンドリア図書館とその蔵書は、紀元後5、6世紀ごろには、ほとんどそのすべてが失われてしまうことになりました。しかし、このとき失われた蔵書コレクションは、グーテンベルクが活版印刷を発明するまでは、ヨーロッパ中の書物が束になってかかっても匹敵することはなかったと言われています。この間の時代の人々は、何か学びたいと願っても、さぞや不便を感じたにちがいないでしょう。

さて、私たち白鷗大学の図書館も、学生の皆さんが日々勉強したり、読書そのものを楽しんだりできるよう、そして、教員自身にとっても研究活動の生産性が向上するように、蔵書が蓄えられています。ちなみに、本年度、私は図書委員を仰せつかりました。ですので、なおいっそう、折に触れ、本学に関係するすべての人に役立つような蔵書コレクションをさらに充実させるべく尽力したいと思っています。ただし、すでに現段階においても、なかなかの蔵書保有状況となっており、学生の皆さんにとって身近ですぐにでも役立つ蔵書

がたくさんあります。たとえば、私の専門とする法学分野に関して言えば、定評のある基本書などはすべて取り揃えられているといっても過言ではありません。

そこで、学生の皆さんが、普段、本学の図書館をどのように利用しているかをみると、よく使っているなあと感じる一方で、せっかくの図書館をうまく活用し切れていなくて、もったいないなあと感じることもあります。具体的には、図書館での利用が集中し混み合う時期がいつかを観察してみると、大抵は試験やレポートの締切りが近づいた頃に偏っているように思えます。しかし、時間がきっちりと決まっている講義とは異なり、自分のペースで納得がゆくまで時間をかけられることこそ、本を読んで学ぶことの良さ、楽しさです。ですので、できれば、普段の勉強にこそ図書館とその蔵書を思う存分活用してもらいたいと思っています。

また、たくさん本や雑誌の中から、自分の探しているものをうまく見つけだせずにいる人も見かけることがあります。おそらく蔵書が多いからこそ、迷ってしまうのでしょう。でも、図書館は、きちんとしたルールにしたがって本や雑誌を整理整頓しています。ですから、そのルールをよく理解することで、自分の探したいものを簡単に見つけ出すことができます。それができれば、もっと効率的に日々の学習やゼミ活動で役立つことは言うまでもないでしょう。ちなみに、どのようなルールにしたがって探し物をすれば良いか分からないという学生の皆さんは、ぜひ、図書館のカウンターに行ってみてください。そうすれば、図書館の方が懇切丁寧に対応してくださいます。

なお、ここまでは、図書館が勉強にどのように役立つのか、あるいはどのように活用したらよいかといった、やや堅苦しい話でした。ですので、

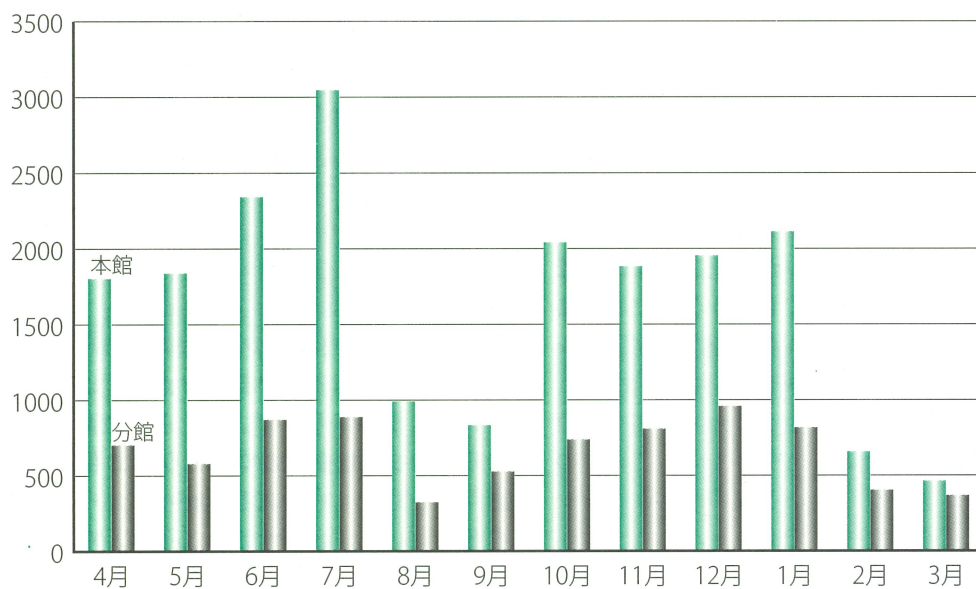
最後は、少しだけ柔らかい話で締めくくりたいと思います。すでにチラッと書きましたが、本学図書館では、そもそも皆さんが本というものに親しんだり、本の好きな人が読書を楽しんだりできるよう、幅広い種類の本を集めることにも努めています。例えば、最近ベストセラーになったり、映像になるなどして話題となった、村上春樹さんの「1Q84」、湊かなえさんの「告白」、東野圭吾さんの「新参者」も図書館には置いてあります。決して専門書ばかりではないのです。

私個人の経験でいえば、活字の世界にじっくりと浸る時間があつたのも、また、活字に浸ることで得るものが多かったのも、学生の時でした。と

くに、学生時代、文学の先生が講義の中で、一番、本を読むことができる時期だからこそ、専門ではない本も含めさまざまなジャンルの本に挑戦し、できれば年間100冊以上は本を読んでほしいと話されたことが今でも強く印象に残っています。

皆さんにも、是非素晴らしい読書体験をしてもらいたいと思いますし、そのために図書館が役立つことがあれば大変嬉しく思います。学生時代における素敵な本との出会いは、一生の財産になると思います。皆さんにとってそんな大切な一冊がみつかることを心から願っています。また、きっとみつかるはずですよ。

図書館貸出統計 2009年度



利用者一人当たり冊数 本館：6.1 分館：10.9

ささやき

新しくなったOPACはもう使っていただけましたでしょうか？
また、Webサービスがより豊富になりました。是非マイライブラリ
(パーソナルサービス) 利用申請してHPにアクセスしてみてください。

平成22年10月25日 発行
編集 図書館だより編集委員会
発行 白鷗大学総合図書館
〒323-8585 栃木県小山市大行寺1117
(0285)22-9737 (直通)
ホームページ <http://hakuoh.jp/library/index.html>
印刷 株式会社尚文堂印刷所